畫本西遊全傳

初編

7

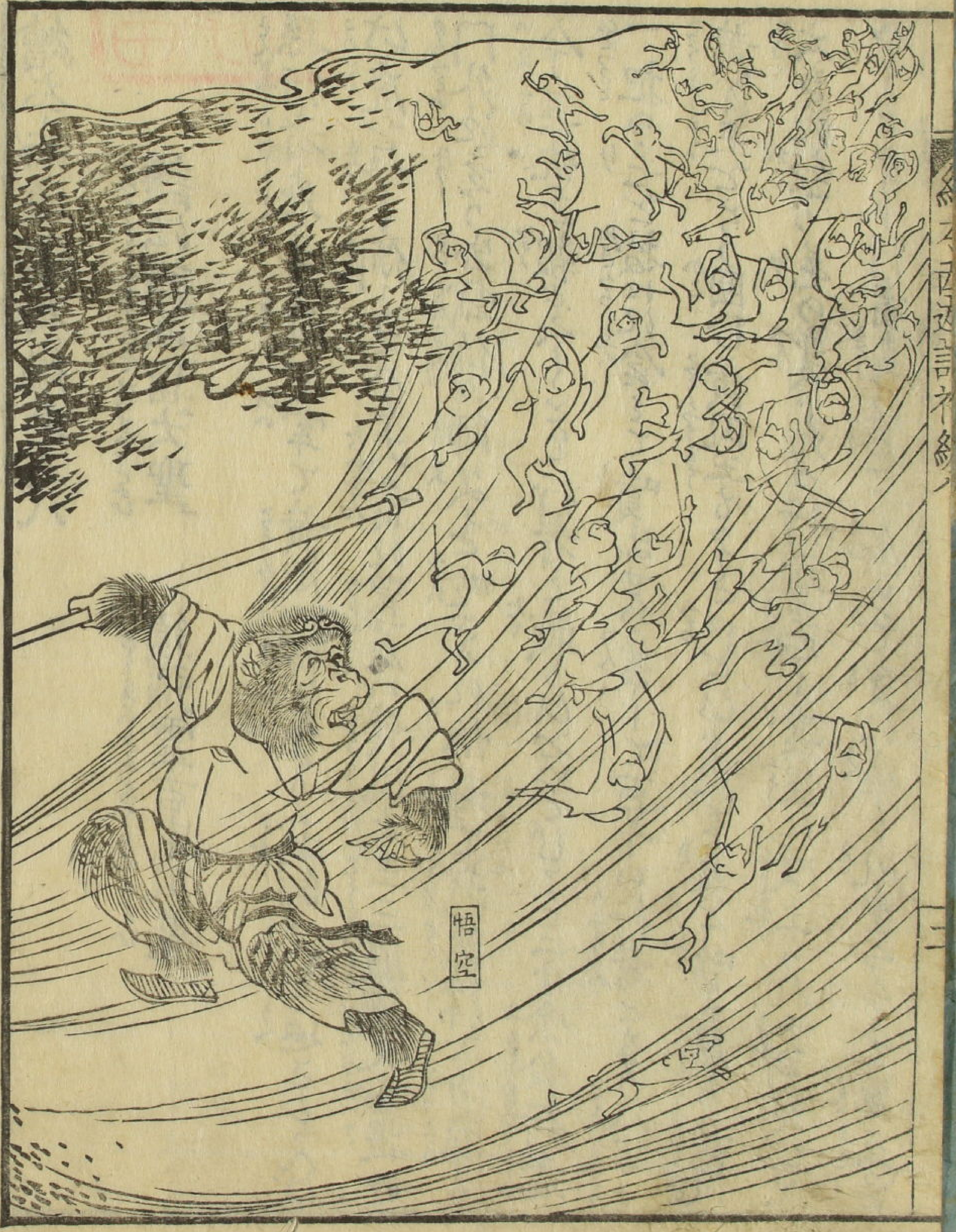
八

へ13
3843
7

繪本西遊記初編巻之八

護法設莊留大聖　須彌霊吉定風魔

孫行者死る虎を牽て黄風洞に来り我師父を返さずんば此虎が如く倒さんと大音に罵れバ黄風大王三股鋼叉を提げ門外に走り出我你が師父を喫ざるに你却て我先鋒を打殺せり今其仇を報ずべしとて行者と戦ひをいどむこと三十余合行者一把の毛を抜に含みて噴出せバ変じて百千の行者となり八方より黄風王をとり囲む黄風王もすこし口をひらきて氣を吐すと忽ち黄風大きに起り毛の変じたる行者悉く虚空に吹上られ足もたまらずやうぞなし行者急に毛を集めて身に返し風をふせぎて突来るを


悟空

黄風妖術挫孫行者
黄風王

黄風王ふたゝび行者が面に向て怪風を吹かくれば此風行者が眼に入て更に目をひらく事あたはず行者大きに驚き身を返して逃走るを黄風王もはなされじと追ども風を收めて洞の中へ帰りける行者八戒に逢て戰ひの始終を物がたり妖精攫ゑ我師父を殺さんとはかるなれば再び計を定めて救ひ出しまいらせん我怪風に吹れて眼珠痛ミ淚流れて止ず此邊に眼科先生ありや療治を求めて後戰ふべしとて八戒と共に馬をひき山の麓の人家に立より一宿を乞ひけるに裏より老翁一人立出両人をいざなひ入胡麻飯をすゝめてもてなしける時に行者老翁に問ふて曰く我今日黄風洞の妖怪と戰ひ風に吹れて眼の痛たへがたし此ほとりに眼薬を賣家やあると尋るに老翁曰くかの妖怪が吹出せし黄風は

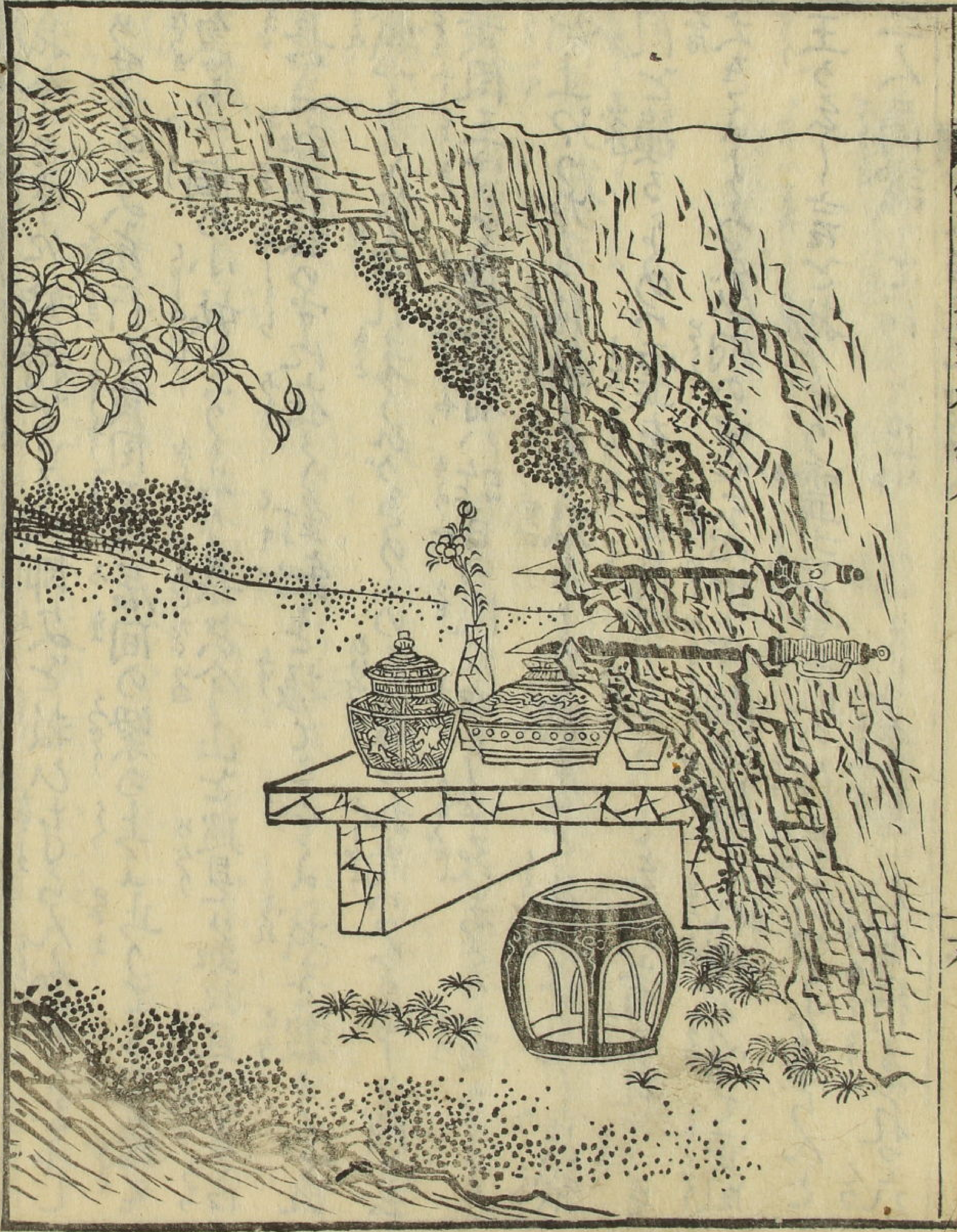
昧神風と号て人の命を縮む神仙の方にあらざれば治することをあたはず我家に花九子膏と云仙薬あり風眼を治するの仙方なりとて取出してあたへければ行者大きによろこびうけとりを眼に點じ八戒と同しく其夜は爰に睡りける夜明て行者目をひらき見るに眼さはやかに常より益〻明らかにて起上りて四方を見るにありし家居も老翁も倶に見えず只柳の木のかげに八戒と同しく臥居たり八戒大きに愕き我何時かかゝる荒野に寐るぞやとさはぐに家はなくし老翁は何地へ行しとさがしたるを行者笑て你獃子気をしづめて樹の上にかけし帖子を見よと云八戒仰ぎ是を見れば四句の頌あり其詞に曰く

護法(ごほう)與(くすりをあたふ)ㇾ藥(ごりやう)療ニ(ぎやうじやがまなこを)行者眼一

荘居非是俗人居　護法伽藍點化廬
妙薬與君醫眼病　盡心降怪莫躊躇

行者八戒に示して曰く是伽藍観音菩薩の命を受て暗に師父と我々を保護するものなり你等こゝに在て馬と行李を守るべし我ハ師父の安否を窺ひ来らんとて洞の前に飛行身を変じて一個の蚊虫となり洞中へ飛入り師父をたづぬるに椿の木に三蔵をからめ置り行者師父の頭の上に止りて師父〳〵と呼ければ三蔵行者が声を聞て甦りたる心地して悟空你いづくに在と問へば行者曰く我ハ是則師父の頭の上に止り在り

我今日中に妖精をとらへ師父を救ひまゐらん心安くおぼしめせとて又飛行て黄風王が居間の梁の上に止りてうかゞひ見るに忽ち一個の小妖来りて申す某只今山を巡見けるに耳大きく口長き和尚林の中に在て釘鈀を振てきたり我を殺さんとせし我やう〳〵に逃れ来りしがきのふの毛臉の和尚ハ見えずと云黄風王聞て孫行者ハ昨日の風に中り必死せる者ならん此上いかなる強敵来り攻るとも我是を虀にもすべし只我風を鎮るものハ霊吉菩薩のみなりと云行者これを聞て大きによろこび洞の中を飛出本相を顕し八戒を呼て黄風王が云し言を物がたり霊吉菩薩の住處ハいづくなるらんと二人商議して居たる所に忽ち老翁一人出行来れるを八



繪本西遊記 初編 八

戒の曰く師兄ハ老人に向ひ玉へといふに行者點頭く老人の前に立よりて霊吉菩薩の住玉ふ所や知り給ふと尋ぬれバ老人答て此正南に小須彌山といふ山あり是霊吉菩薩の住所なりかくいふ我ハ太白金星李長庚なりと云終て清風と化して飛去りけれバ行者是をみて直に觔斗雲にまたがり暫時に小須彌山に至り霊吉菩薩に事の子細を語り師父を救ひ玉へといへれバ菩薩そのまゝ領承ありて定風丹を懐にし飛龍寶杖を携へ行者ともろともに雲に乗りて黄風洞に至り玉へバ行者洞の前に立てまづ狼藉をなして門の扉を微塵にくだき黄風来れと叫びけれバ黄風王大きに怒り例の鋼叉をさゝげおどり出て行者と戦ふ事数十合黄風王

まさに口を開きて風を吹んとなしけるに霊吉菩薩雲中より飛龍寶杖を投下し玉へバ忽ち八爪の金龍と變じ黄風王が頭を摑んで空中へ引上玉へバ遂に黄風が本相露れ黄毛貂鼠となりけるにぞ菩薩行者に宣く他ハ霊山に住し得道なりしが琉璃盞の清油を偸み金剛が為に把へられんとするを恐れ此所に来りて妖精となれり我ハ渠を如来の許へ伴れ行御下知によつて罪を正すべき旨ありとて遂にかの鼠をとらへ西の方へ去り玉ふ行者西に向ひて礼拝し八戒と倶に洞の中にかけ入り小妖を悉く打殺し師父を救ひ出し暫く洞内に労れを休め再び路をもとめて西をさして行給ふ

黄風

霊吉杖龍摑黄風頭
霊吉
悟空

八戒大戦流沙河　木叉奉法収悟浄

寒蝉敗柳に鳴き大火西に向て流るゝ秋のはじめになりぬれバこゝろぼそくも三蔵ハ二人の弟子にいざなはれ嶮艱を凌ぎ道をいそぎたまへば忽前面に一條の大河あり大波湧立て河の廣さ其いくばくといふ限りを知らず岸に上て望たまへる時傍に一ツの石碑あり上に流沙河の三字を篆字にて彫付腹上に四行の小楷字あり

八百流沙界　三千弱水深
鵞毛飄不起　蘆花定底沈

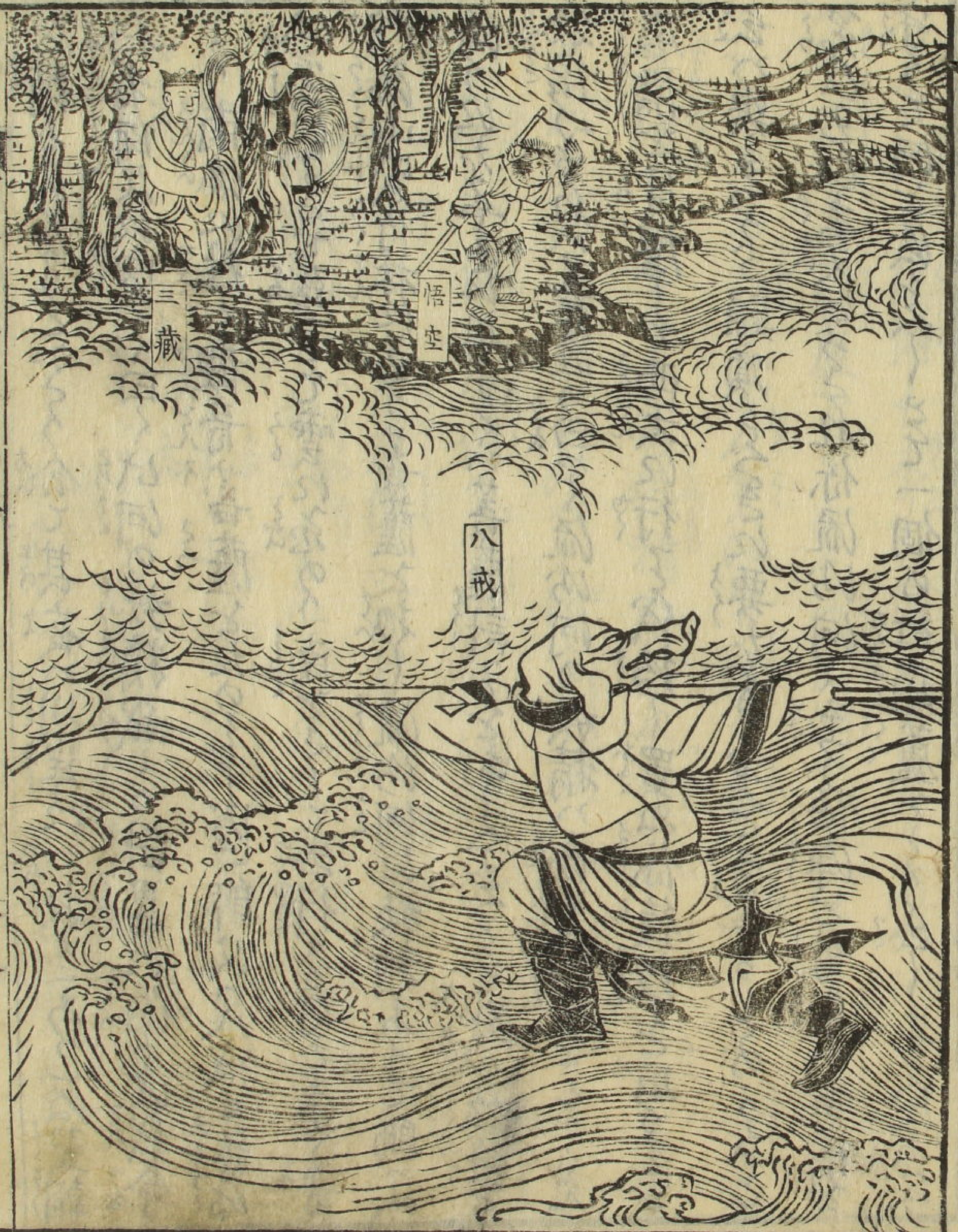
三蔵是を見たまひてはてしもなき流沙河なり何として此河を渡らんと容易からぬ渡を河岸に立て眺めたまへば忽ち河浪山のごとく巻上り一個の妖精あらはれ出て八戒鈀を提げ走り寄て是を見ればかの妖精項に九個の髑髏を繫ぎ掛け一根の寶杖を振て八戒を目がけ討てかゝる八戒も釘鈀を持てさし戦ひ都て二十余合に及ぶ所に行者鐵棒を揚て戦ひを助んと此妖精行者が來るを見て叶はじとやおもひけん涼く水中に沈て行方を見失ひぬ八戒大きに怒り罵りけれハ我むかし天上に在て天河水兵を督どり頗ぶる水性を知れり何卒陸へ誘ひとも拿へ來て此河を案内させんと云も理り直綴を脱ぎ釘鈀を提て水底に潜りければかの妖精杖擧てさぐりとゞむる中に在て戦ふ事時ばかり八戒心中に一計を生じ偽り負て水上に走り出れバ妖精

霊吉牽妖鼠詣佛所

遁さんとすれバ追ふて水面にあらハれ出浪を蹴立て二時斗も
戦ひしが行者ハまた八戒を助んとて雲に乗て鉄棒を振て
落とせバ妖精是を見て再び水底へ引入んとせしが八戒行者に
向ひ罵りけるハ你弼馬温猴子我妖精を牽て岸に上らんとするに
汝れ再び来りて水底へ落ち入りたり行者笑て你嚷く云
事なかれとて両人ひとしく三蔵の御前に来り戦のさまを物語り
且いふて行者いふやう今日ハ已に晩におよべり夜あけなバ再び計
事をめぐらし此妖精をとらへん師父しばらく心を安んじ今宵ハ此
川端に一夜をあかしたまへとてやがて身を起し雲に乗り人家を尋
て一鉢の齋飯を携へ帰り師父にすゝめ奉りける八戒問て曰く
哥く何國に往て齋飯をもとめ来るや行者曰く北の方七千

里の内に人家ありとしも我此齋飯をもとめし家ハ宮を去ること
凡そ万里八戒笑て曰你偽をいふ事なかれかゝる遠き道を
いかでか須臾の内に往来せんや行者の曰く你いまだ知らず我筋
斗雲ハ一瞬に飛行すること十万八千里なれバ五七千里一万里の道を
行ハ一とび頭をふるよりも速やかし八戒が曰く哥々ただ飛行
に自在ならバ水中の妖精をうち捨て師父を背て一とびに此河を
渡り玉へ行者の曰く你も原来雲に騰る事を知れり何ぞまづ
師父を背て先此河を渡らざる師父ハ凡胎肉骨の人なる故に雲
中にハ登りえず倶に飛行する事ならず汝彼大山を移し大地を縮る
法に至てハ我よく是を行へども苦海超脱せざる人を携へて一寸
も動事ならず只よく師父の身命を守護し我徒が業果の満る

流沙河頭八戒戰妖



と待ゐかりなるとかゝる合て其夜ハ川岸に一夜をあかしぬ翌朝行者師父に向ひて曰く此河の妖精我〻が計畧に陥らバ我今より南海に往て観音菩薩をたのミやらん師父ハ八戒と暫く此處にまたせ給へとて雲に飛のり南をさして出行るほどなく普陀落山紫竹林に至り菩薩を拝し流沙河に妖精ありて師父渡りになやミ給ふねがハくハ菩薩計ひをおしへ玉へとて我の始終を物語りされバ菩薩の曰く流沙河の妖精ハ吾先に善をさとし免唐僧を守護して西天に行て経を約し置ぬ你等経を取ることを云バ渠ミづから帰順をすゝむるに要なき事を労するものゝかなと笑ひ玉ひ木叉をめされ你流沙河に至り悟浄を呼出し唐僧を守りて河を渡すべしとて一個の紅葫蘆をとり出し木叉にあたへたまへバ行者随ひて木叉と倶に雲にのり流沙河に至りけれバ木叉則ちかの葫蘆をさゝげて流沙河の水面に至り沙悟浄ハいづくにあるや経をとる人爰にあり早く来りて謁をなへと叫ばれバ忽ち大浪をひるがへしかの妖精あらハれ出木叉を看て礼をなし菩薩ハいづくにおハしますやと問へバ木叉曰く菩薩ハ来り玉ハず我に命じて你を唐僧の弟子となし此河を渡しやせとの仰なり妖精是をきゝて曰く其唐僧ハいづくにありや木叉曰く東の岸上に座せる僧則ち是なり妖精大きにおどろき黄錦の直綴をかぶり岸に上り三蔵の前に礼を行ひ弟子師父の尊容を知らずに悪の不礼をなせり赦し玉へ三蔵の曰く你真實に我教を守らんとするか妖精の曰く弟子向に菩薩の教化を

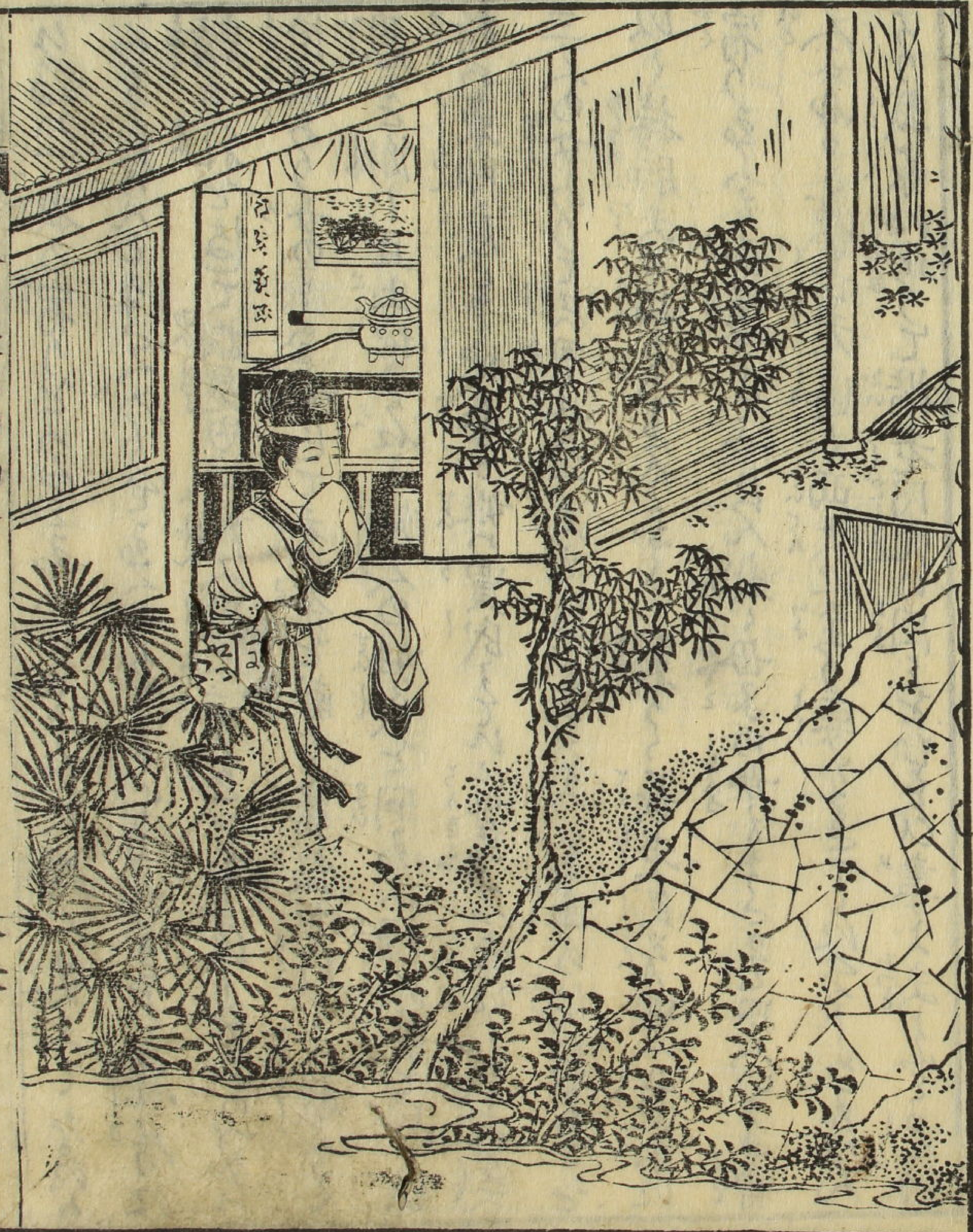
三藏乗葫蘆渡流沙

受法名を沙悟浄と賜り師父の来りたまふを待侘てこそ在ける
何ぞ偽りの理あらんや三蔵是を聞て大きによろこび別に
名付て沙和尚と呼びたまふ其時木叉沙悟浄が始め首に
かけたる九ッの髑髏を索もて繋ぎ菩薩より賜りし紅の葫
蘆を其正中に居て水に浮めて三蔵を請てこれを乗せしめ参らせ
八戒悟浄左右に在り孫行者龍馬を牽て後に附随ひ木叉は
雲にのりてこれを守護し飄然として流沙の大河を西の岸に
着給ふ木叉いそぎ葫蘆をとりおさめぬれば九個髑髏も陰風
と化して消失たり三蔵木叉に向て再三拝礼し三人の弟子と
倶にやがて西の方へいそぎたり

三蔵不忘本　四聖試禅心

師徒四人流沙河をわたりて路をもとめていそぐほどに早秋の季
に至りて日もはや西に没し宿るべき家やあると向ふの方を
望みれば松林の下に一簇の人家あり其中に家作り大
きくして綺麗にて住居したる屋あり行者門内に入てうか
ゞひみるに南面に三間の大廳あり壁に一幅の壽山福海の
画をかけ前に香几を置き空林火の筆なり得もいはれぬ住居
たり内よりいとよき婦人立出て你何人なれば寡婦の家を
窺ふやと咎めるに行者答て曰く我々師徒四人東土大唐
天子の勅をかうむり西方に往て経をとらんとし日既にくれて

師弟至卯度遭妖婦
三藏
沙悟浄
悟空
八戒



しかるハ一夜の宿りをもとめ玉へりと申せバ婦人笑ふてなれバ
くるしからんこなたへ入らせ玉へとてうちつれむかへて廳房に
請じ礼を述て相見しに此婦人嬰粉のきをかざしておのづから
風流あり女のわらハを命じて香茶を献じ齋飯を設く三藏ふかく
恩を謝し且土地の名と婦人の姓氏を問玉ふ婦人答て曰く此
所ハ東印度と申地妾が姓ハ賈氏にてそれ近年不幸にして夫を失
三人の女ありて只男子ハ一人もなしこのころ家事の納むべからざるを
以て擡脚夫を招き入まいらせんとおもふおりから長老師弟四人我家に
宿り玉ふも奇縁にてやあらん我〻母子の女もすでに四人いまだ曽
人をゆるさず長老遠く西天に至り要なきことをくるしめ玉はんより
我家に止りて偕老同穴の契をむすび妻よ夫よと呼れ

みんふれ玉ひ我〻をもなぐさめ玉へなんぞいやげなりしたのしからん我女が
大女ハ眞眞と号す其次ハ愛愛とよび末女ハ憐憐とて艶色あり
風流あり其上我家水田三百頃旱田三百頃果木三百根牛馬
羣を成し猪羊数をしらず荘堡草場とも七十余ケ所家内八九
年の米穀あり其外綾羅金銀倉庫に充らり長老志を決して
還俗し我家の主人となり玉へと勧るにぞ三藏是をきゝ玉ひて恰
孩子の雷に驚き雨にあたる蝦蟆のごとく呆れ果ておろ〳〵ハ飛
此事を守て心神恍惚として思ひべらず汝三藏の袖を引て師父是
より婦人のさるゝごと說話しまくれ何とて一言の答へも返し玉はざるや
此時三藏声を荒らげて叱て曰く你も是出家人をまわすや富
貴を以て心を動かし美色をもて意を留るハ我徒弟にハあらず汝と

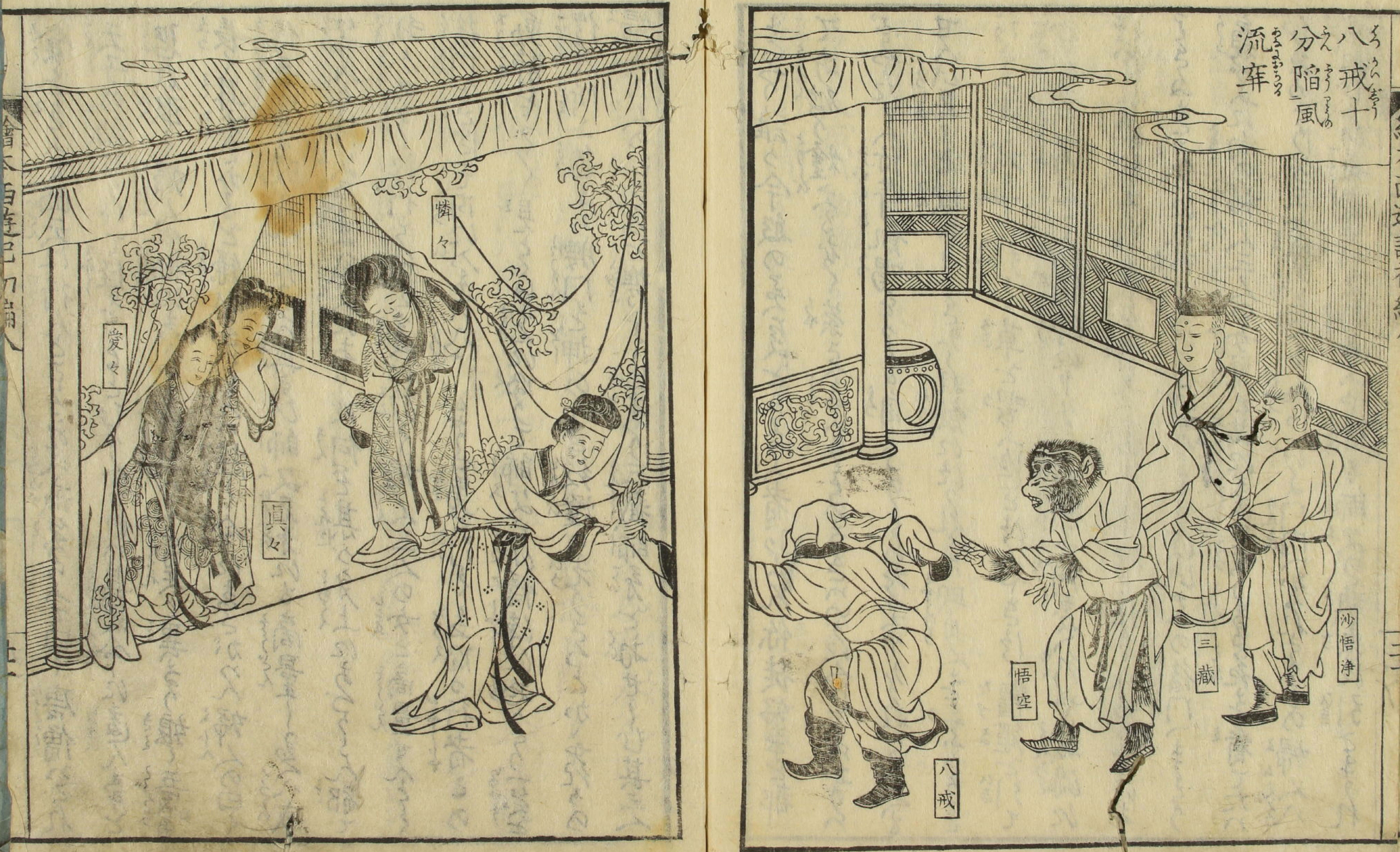
八戒入菊塢起癡情
八戒

愛々
貞々
憐々

宣ふへ婦人かさねて曰く出家に何の好処事がありや三蔵の
曰く故人の詩あり証とすべし

出家立志本非常　推倒従前恩愛堂
外物不生閑口舌　身中自有好陰陽
功完行満朝金闕　見性明心返故郷
勝似在家貪血食　老来墜落臭皮嚢

婦人是を聞大きに怒り這和尚かゝる不礼を云て我をあざむく事
何ぞ甚しき再び你徒と説話を出とて裏面に入て腰門をとざ
しけり八戒は動静を見くらゐに三蔵をうらみ師父とはじめ兄
弟皆是情なきにあらん世の諺にも和尚は是色中の餓鬼なり
とふ事誰か今般の受交ときらふ者ならん你徒好事を都
て打破り燈火もなく茶さへあたふるものなきいかに宣とへおのれ
どもたとへ你等飢渇するも自らがもとめたる事なれバこゝに
せん我ハ馬をそ便なきまゝさなれ餓にたゝれまバ明日人をさゝふる事を
ならぬ也我馬を引く草を喂ハ匠とはいやきはく轡縄を引て
出ぬる行者見とて悟浄にやりけるハ此獃子何処へ行や我跡に
したく窺ひ見るべしとて身を変じて蜻蛉と化し八戒がなりあ
とをみをつけるに八戒ハ馬に草喂んともせず此家の後門へまはり
窺ひ見るに向の婦人三人の女児と共に菜の畦りある花を看てたれ
むすめらしが三女八戒を見とく恥らしげに門内へかくれさりの婦人八
戒にむかひ長老いづくへ行まふや你も師父の執意に引かまれ


八戒十分陥風流穽
愛々
憐々
眞々
八戒
悟空
三藏
沙悟浄

食をこふて西天に行んとするに八戒答ふて曰く唐僧ハこれ
天子の勅をうけて経をとりにむかふ人なれバ其君命に違ん事を
恐れ敢て婦人の勧にしたがハず我ハ下る足と異なり娘子吾嘴
長く耳大きなるを嫌ひ玉ハずんバ謹て命にしたがハん婦人の曰く
你吾言に順がハんとならバ再び師父兄弟にも商量しまへ八戒
答へて師父原来我父にあらず何ぞ其が身上にあづからん都て
我心のまゝに行らんのミ爰に於て婦人三人の女と商量すんとて
後門をとぢて内に入ける八戒ハやがて馬を引て立帰る行者この
動静をとくと見とゞけたれバ帰りて師父と沙悟浄にかたる一箇の
住る所に忽ち腰門を押ひらき紅燈の光りさすとか、女紀りの
婦人三人のむすめを携へて出来り三藏師弟をおせしむ其三人
の女擦致尋常にあらず娥眉翠を画き粉面春を生し真に
傾國の色あり八戒立寄り此美女を見て恰も酔るがごとし
此時行者一手に八戒をとらへ一手に婦人を引き我你徒が
後門をもてあぐらりせしを聞罷り婦人はやく女婿を帯て
進ミつゝそ推て裏面に突入られハ八戒ハ足も趄くによろめき
法く遂に門を扉して入りけり

繪本西遊記初編巻之八終